
ホットニュース(平成13年度／第40号)

●今月の業界ホットニュース／～街なか活性化への一言～

都市計画家協会の「街なか研究会」に参加しているが、このメンバーに「地域開発(2001年10月号)」の標記の原稿依頼がきた。短い一言なのでここで事前発表します。

街なか活性化が、商業問題では解決できないことは久しく言われてきた。例えば1haの大型店の床面積は、沿道両側に形成されているそれぞれ奥行き10mの商店街の500m分に相当する。2F部分まで入れても250m分である。商圈人口の増加も望むべくもなく、パイが減少しそうな状況の中での競争激化で、生き残るのは並大抵のことではない。一方、国民の消費支出の構造から見ても、いわゆる商品への支出は多くない。住居、交通・通信、医療、教育等の支出で45%を占めている。生鮮食料系への10%を除くと、商品系への支出は25%程度である。中心市街地の商店街と、大型店、コンビニ、郊外専門店等はこのパイで競争していることになる。

ところが、この他に教養娯楽サービス、外食、こづかい、交際費等で20%程度の支出がある。この消費行動に対応する生活活動を考えてみたらどうだろうか。そしてこれらの活動に必要な場を街なかに整備し、街なかをこの活動の場にするのである。これからは高齢人口が急速に増加し、また時間に余裕のある元気老人が増加する。戦後の経済成長にともなう進学率の増加によって、高学歴高齢化社会ともなる。これからの高齢者は、これまで以上に文化的活動やコミュニティ活動・社会的活動に生きがいを求めてくるようになると思われる。

コミュニティ活動も一様ではない。いわゆる地域コミュニティだけではなく、学校や職業など都市型社会の中で育まれた都市型コミュニティの活動が増加してくるのではないかと思う。中高年の登山や山歩きのパーティが増加しているとよく耳にするが、おそらく地域型ではなく都市型コミュニティのグループが多いようである。このようなグループでアウトドアの活動だけでなく、文化的な活動の増加も見込まれる。コーラスや演劇や、はてはオペラまでものにするグループもあると聞く。この種の活動は、場があれば稽古も公演も街なかに相応しいものであり、街なかに人が集まり一定時間滞在することにより、街なかでの消費の一助ともなろう。

いずれにせよ、街なかで行われる可能性のある活動の種を数多く探し、その活動を呼び込むことのできる環境を設定し、その活動を支え、少しでも多くの人の街なか滞在時間を増やすことが、街なかの活性化につながるのではないだろうか。

(代表取締役 堀田 紘之)

●これからのコミュニティとまちづくり

コミュニティの崩壊が大都市から地方都市まで蔓延しているなかで、高齢化、情報化、価値観の多様化、余暇化などの流れはさらに進んでいる。これまでコミュニティの要素には、「場所性」、「共通の価値や目標」、「社会的相互作用」があげられていたが、これからは地域とつながりを持たないネットワークが「コミュニティ」として位置づけられる流れにあるようだ。医療などの地域情報サービスの提供や、コミュニティビジネスの展開などの新たな動きがみられるが、一方で加入率が大幅に低下している町会も、高齢者のボランティア活動の重要な母体になっている。まちづくりにおいて「コミュニティの維持・再生、醸成」のために何をすれば良いのか、具体的にはなかなか難しい。交流空間(集会所や広場など)のつくり方も、新たなソフト対策も、「多様な価値観を持つ住民」を意識して考えていくと、結局は「地域性、個性」に繋がりそうである。多様で個性ある選択肢を選んだ住まい手の愛着が、コミュニティ醸成の原動力になるのではないだろうか。「住みたくなるまちづくり」には、コンサルの感性が問われそうだ。財政状況の逼迫の中で修復時代に突入しはじめたなかで、「地域コミュニティ」の役割が重要になる時が再来するかもしれない。

(第一計画室長 坂井 雅子)

●記憶は弱者にあり

田舎であるお婆さんがいつも乗る電車を乗り間違えて、各停(鈍行)で行くところを急行に乗ってしまった。駅に着いて駅員さんに急行料金を請求されたお婆さんはこう答えたという。いつもより短い時間しか電車に乗ってないのになんで高い料金を払わなければならないのか、と。つまり、お婆さんにとって目的地に早く

着くことに意味はないし、第一、早く着いてもやることがないではないか。

これと同じようなことは世の中にいくらもあって、たとえば、道路景観上望ましいということで狭い歩道上にも植樹や植栽などこぞって道路緑化を進めてきた結果、今やバリアフリーの観点からこれらは高齢者や障害者にとって歩行空間を狭める邪魔者以外の何者でもないという。その狭い歩道を自転車も走るから、勢い衝突して怪我人まで出る始末である。「笑点」でお馴染みの円楽師匠があるラジオ番組で「人間というものはなんだかわけのわからないものである。蟻を踏んづけちゃいけないと思って歩いていると蛙を踏み潰しちゃったりする。だから、面白いんだ」と答えていた。さすれば極言しよう。どんなに文明が進歩し、政治システムがいかに民主化されようとも、人間の社会に安定なんかない。アメリカ先住民のイロコイ族では、重要な話し合いの冒頭で七世代後の生命への配慮を誓い合うという。かの映画監督のスピルバーグはNYのアクターズ・スタジオでのインタビューでこう答えている。「人生において最も大切なことは心の声に耳を傾けることである」と。

遠い祖先から受け継いできた記憶や心の声をどうやって聞いたらいいのかわからないという方へお薦めは、J・ダイヤモンド著「銃・病原菌・鉄」、P・アンダーウッド著「一万年の旅路」の書籍とスピルバーグ監督の映画「アミスタッド」である。この夏休みに是非。一万年以上にも及ぶ人類史の遠い記憶を呼び覚ませるかもしれません。

(第四計画室 石井 泰良)

●青年海外協力隊レポートvol.1～モロッコってどんなところ？

— 地方村落編

1ヶ月半の現地語学研修終了後、いよいよ配属先へ赴任...となる前に、赴任地とは全く違う町へホームステイに行く機会があった。先進国と変わらぬ暮らしを送れる首都から離れ、電車で4時間で着いたマラケシュからさらに車で1時間、オート・アトラス山脈の麓にあるティゲドゥインという村へ来た。ここは、人口約2万人ではあるが、千人くらいを中心地の他は、山間の小さな集落ばかりというまさに田舎。モロッコの先住民であるベルベル人の村である。中心地にこそ電気・水道が通ってはいるものの、中心地より奥には車も入れず、何時間も歩いて集落まで行かなければならないという状況であった。

この村で何をしたらかと言えば、実は何もしていない。隊員に紹介された家に行き、少しだけ生活を共にしただけである。食事を終えて一段落すると散歩に出掛ける。その繰り返し。この人は散歩が好きで、片道30分とか1時間くらい、よく出掛ける。テレビはかなり普及しているようだが、家の中の娯楽がないからだろうか。それよりも、家族で連れ立って出掛けることを好んでいるようにも思える。外で友人に会って、長々とお互いの家族の調子を尋ね合うのも日常的な風景だ。もちろん、生活上の必要から歩くというのもあるが、この村を囲む大自然の中では、家の中に籠るのではなく自然の中で日を送るのが当然のようにも思える。文明社会からは遠く外れているかのようなこの村でも、中心地の集落ではテレビも電話もある。でも、文明に近づくことがこの村にとって本当にいいことなのかなと、考えさせられる旅であった。

(第三計画室 酒井 夕子)

アルメックホットニュース(平成13年7月15日発行)

////////////////////